

戦争を支援するとは何か

9・11の負の遺産が語るもの

ニューヨークの世界貿易センタービルに旅客機が突っ込み、ビルが崩壊していく。2001年9月の米同時多発テロ(9・11)から四半世紀が経過したが、衝撃的な映像は多くの人に記憶されている。一方で顧みられていないことがある。「対テロ戦争」優先の治安対策により、人生を奪われた人々の今に続く苦しみや、若い米兵らが抱えるトラウマだ。彼らの言葉に耳を傾けると、米軍の後方支援強化を決めた日本が突きつけられている問いが浮き彫りになる。「戦争とは、戦争を支援するとは何に加担することか」

寄稿

ジャーナリスト・舟越美夏さん

日常的に拷問、虐待

舟越美夏さん(ふなごし・みか)福岡県出身、89年共同通信社入社。元アソシエイト、ハノイ、マニラ支局長として東南アジア、南西アジアを担当し、アフガニスタンに関しては01年の米国主導の攻撃から現在まで取材し続けている。19年、共同通信社退社。



登壇したモハメド・ウルド・スラヒ氏(中央)
登壇者ら=6月、オーストリアグラーツ大

大半だった。司法手続なきの無期限拘束で、「強化尋問」と称する拷問や虐待が日常的に行われた。米紙ニューヨーク・タイムズによると、9・11に関係したとして有罪判決を受けた者は一人もいないが、今も15人がグアンタナモで拘束されている。

元収容者たちが伝えるのは、拷問や虐待の残酷さだけではない。恐怖にとらわれた者が個人の尊厳を踏みにじるさまや、憎しみの連鎖を断ち生きようとする強靱さなど、極限に置かれた人間の隠れた



腕に残る手錠の跡を見せるボウメディン氏=6月、オーストリア・グラーツ大

「スパイになれ」と言われ拒否した後、グアンタナモ収容所に移送された。

「グアンタナモ収容所にいるのは、最低最悪の人間たちだ」。当時のブッシュ大統領は公言し、ラムスフェルド国防長官は、彼らは「不法戦闘員」で、捕虜の権利を守るジュネーブ条約に基づく権利はないと述べた。

グアンタナモに約3年間、拘禁されたパキスタン系英国人のモアザム・ベグ(58)は、米兵の多くが、米国しか知らない「知らない世界に恐怖を抱いていた」と語る。米兵は「収容者は世界で最も危険で、隙をついて襲いかかるやつら」と教え込まれていた。収容者に強い敵意と警戒心を抱いていたが「ハリウッド映画を通じて世界を理解し、頭の中でフィクションの世界を作り上げていく」ようにも見た。

「軍事専門家」とあだ名された収容者は、自国の警備隊に1年間、所属した。モアザムは「暗殺者」で、サミ

側面でもある。ただ、彼らから20年もの拘束に耐えた。グアンタナモ収容所

グアンタナモ収容所は、「9・11の負の遺産」と呼ばれる。米国は9・11後、中東やアフガニスタン、アフガニスタンのイラクなどにある秘密収容所に連行。そのうち約780人がグアンタナモ収容所に移送された。タクシードライバー、人道支援者、ジャーナリスト、大学進学を目指していた18歳、混乱の中で拘束された14歳の少年もいた。米国の報奨金を狙った虚偽の情報など、誤情報に基づく拘束が

爆撃されていたのは市民だった。壊滅した村、負傷した子どもたち。ロケット弾による巨大な穴で、家族の遺体を探す住民がいた。時にはタリ

「軍と諜報機関のために仕事をしていた」と警戒された。「米軍輸送機の油圧ホースを噛み切った」墜落させようとするような連中だ」というメイヤーズ米軍統合参謀本部議長(当時)の発言もハリウッド調である。

「信仰と学習が支え」

「収容所に入れられれば、どうすることもできなかった」とモアザムは言う。無実を訴える場所はない。拷問や虐待で精神に異常を来した者、自殺を試みた者も一人ではなかった。そんな中で、自らの尊厳と正気をどう保ったのだろうか。

「信仰と英語の学習が支えだった」と、モロッコ出身のアブドゥルラティフ・ナセル(61)は言う。「収容所は精神と尊厳、人間性を打ち砕くよう設計されていた。目的と規律をくれる学びは、抵抗であり希望だった」。20年間の拘束中、英語とアラビア語の手製の辞書を作り上げた。

サミの7年間の拘禁を支えたのは、ジャーナリストとしての気概だった。「全てを観察して記憶し、後に伝える」。解放後に出版された著書「プリズナー345」には、自らの体験のほか、収容者達の支え合いなどが、細部に渡って冷静な筆致で書かれている。

収容者にとって唯一の抗議方法は、ハンガーストライキだった。ハンストは、弁護士らを通じて外部に伝わり、大手メディアが報道した。100人以上が参加するハンストが度々起きた。これに対し収容所は、強制給餌を実施した。それは拷問だった。「拘束椅子」に縛り付け、鼻からチューブを入れ経腸栄養剤を流し込む。鼻や喉に強烈な痛みを起し、嘔吐を催し、時には肺に入った。世界医師会や国連から強い非難が上がった。

アルジェリア出身のラハダル・ボウメディン(60)は、イスラム圏の国際赤十字「赤新月社」に所属し、ボスニア・ヘルツェゴビナで人道支援活動をしていたところ、02年1月に拘束された。グアンタナモでは「私がここにいる理由を教えてください」と、要求し続けた。「回答するまで、妻の手から受け取るもの以外は口にしない」。強制給餌に耐えながら、解放されるまで2年半の間、ハンストを続けた。

その間にホリエモンは米政府を相手取り、拘束の適法性を審査する「人身保護令状」を請求する権利を求めて法廷闘争を展開した。08年6月、米連邦最高裁は訴えを認め、翌年彼は解放された。信仰と家族への思いだけが支えだった。彼の手首には、7年間の手錠の跡が残っている。

解放されても苦難は続いた。グアンタナモから向かう国は、米国が決めた。母国で解放され家族と再会した者は幸運だったが、サウジアラビアでは、到着後に刑務所に入れられた。イエメンなど出身国が政情不安の場合は、米国務省が「再定住国」を仲介し、ウルグアイなど60カ国以上が検討された。米国からの謝罪や補償はない。身分証明書やパスポートは返却されないことが、解放後の生活をさらに困難にした。誰もが心身の病を抱えるのに、移送先の政府から支援は期待できなかった。

特別難滞者の一人で、携帯電話を通じて会議に参加したイエメン出身の男性は、数人と共にガザスタンに移送され、政府の厳しい監視下に置かれた。言葉も理解できず、収入の手段がない。絶望し自殺した人もいた。22年に解放されたアルジェリア人のアフアン・バーアミ(53)は、自国に移送され母と再会した。しかしグアンタナモに20年

いた」と偏見の目で見られ、職が見つからない。結婚は叶わぬ夢だ。病気の母の世話をしながらどうやって生きていけば良いのか。アルジェリアからビデオ通話で会議に参加した彼は、出口が見えない苦境を訴えた。

「アフアン、君の苦しみは僕たちには分る」。会場から呼びかけたのは、モリタニア出身のモハメド・ウルド・スゴ(56)だ。モハメドは国際テロ組織アルカイダの重要人物と誤認され、激しい拷問を受けて、15年にわたって拘束された。獄中で書いた手記が米国人弁護士らの尽力で出版されてベストセラーとなり、後に映画化された。16年10月、故国に移送され家族と再会したが、政府はパスポートを3年間発給しなかった。

心身の病と戦いながら通じていたが、21年、オランダの劇団に専属作家として招待された。オランダで煙草が台頭し、移民排斥が声高に叫ばれていた頃だが、そんな風潮に抵抗する人たちが、彼に転



アルジェリアから日々の苦境を訴えるスフィアン氏=6月、オーストリア・グラーツ大

機をもたらした。

「文化的価値」の強調

アンネ・フランク財団はモハメドに「アンネの家」の一つを借居として提供した。アムステルダム市議員、ハルゼマ市長も力強い支援者だった。排外主義や権威主義に抵抗し、民主主義の保護を目標とする都市国際ネットワーク「自由都市協定」の議長でもある。モハメドの映画「モリタニア」を見たハルゼマ氏は、彼を真実に招待した。「当時、モハメドには、完全には移動の自由がなく政治的正義を求めていた。アムステルダムで会った市長は語る。

歴史の車輪に巻き込まれた人、押しつぶされたりした人々に私たちがどう対処できるのか。自由のための戦いとは何か。「モハメドはそんなテーマの象徴だと感じた」。ハルゼマ氏は、フローニンゲン市の市長と共に、モハメドへのパスポート発給を政府に働きかけた。強調したのは「文化的価値」。作家で人権活動家、著作や映画で世界的に知られた人物が、学校で人権と平和について若者に教えている。「これこそがオランダにとっての文化的価値だ」。

当時の政権は移民に厳格だったが、政権交代直前にパスポート発給を認めた。次期政権は極右主導だと分かっていたからだといふ。24年10月、モハメドにパスポートが発給され、市民権授与式には国王夫妻も訪れ祝福した。

会議参加者の中に、元米軍将校ジョージ・マクマスタース(60)の姿があった。海兵隊の退役将校だった彼は、9・11の発生で軍に戻り、45歳で陸軍に受け入れられた。03年から04年にかけて派遣されたグアンタナモ収容所では、初歩的なアラビア語ができることで防護活動を担当した。収容所内をくまなく回り、収容者が動物のように扱われていることに衝撃を受けた。小さな檻、窓がない房。床や壁に顔で擦られた男たち。悲鳴を聞くことも度々あり、首つり自殺を図った人も見た。「私が知るアメリカではない」と思った。



オランダ・アムステルダム市のフエムケ・ハルゼマ市長=6月、アムステルダム市庁舎

日本も事実上加担

語り合うモハメド氏(左)とジョージ・マクマスタース氏=オーストラリア・グラーツ大

ことを話したのだ。数百人の収容者と話し、マクマスタースは「彼らはテロリストではない」と確信していた。国際法に反する拷問で疑問音が望む答えを得ても、米国の安全には脅がらない。「この美徳を米国民に知らせなければ、私も虐待に加担したことになる」と思った。収容所と収容者について、知り得る限りをノートに記録し、11カ月の任期が終わった時、荷物の中に紛れ込ませて米国軍部の見せに送った。

「戦争の実態を知らせたい」。執筆を後押ししたのは、その後には派遣されたテロで経験だった。大量破壊兵器が隠されているとして米軍が侵攻を主導したイラク戦争で、フセイン政権が崩壊。その後は激しい内戦となった。「戦略的思考なしに行われた不当な戦争」で、多数の市民と若い米兵が犠牲になった。海兵隊員だったマクマスタースは現在、国防総省を相手に出版の権利を巡って争っている。



ースの息子も車爆弾で重傷を負い、それが15年前に死んだ。戦争の残酷性と無意味さ。10年かけて原稿を仕上げ、国防総省に審査を求める。原稿は文筆が磨きられ、て返却された。マクマスタースは現在、国防総省を相手に出版の権利を巡って争っている。

会議参加を誘ったのは、元米兵を通じて知り合ったモハメドだった。元収容者たちに歓迎されたが、今も続く彼らの苦難の日々を聞き、罪悪感と悲しみを覚えた。彼らの涙を見て、自身のトラウマを思い出した。銃撃戦で母子3人を巻き添えにした。「良い兵士などいない。戦争は人を獣に変えてしまう。それが現実だ」。

「戦争支援者は、戦争の被害を受けたことがない人々だ」。モハメドの発言に深くうなずいた。

グアンタナモ収容所やテロなどの米軍収容所で行われた虐待や拷問は、米政権トップからの指示だった。米兵に命令を拒否する権利があるが、実際には難しい。それに精神的な傷を負った兵士は少なくない。若い兵士たちを戦争犯罪者に追い込んだ」とマクマスタースは憤る。

英国に住むモアザムの元兵はこれまで、6人ほどの元兵士たちが連絡してきた。「今で

も懲らさる」と電話口で泣き出す人もいた。「虐待を指示した国は許さないが、謝罪する元兵士とは友人になれる。私たちは人間だから」。モアザムは、収容所で何が行われたかを証言するプロジェクトを元兵士らと共に続けている。

他国にも目を向ける

「収容者会議」は3回目を迎えた。発起人でアエルトリコ大のドン・ワリチエク教授は「世界で何が起きているのかを知り、理解するのは簡単ではない。だから他国の問題に目を向けることが重要だ」と語る。グアンタナモ収容所での人権侵害が知られた当初、「自由と民主主義、人権」を掲げていた国々は日本も含め沈黙し、事実上加担した。「グローバルな問題に私たちは無関係でなく、責任の一端を担う。声を上げる必要があるのです」。

教授らは、元収容者たちの証言などを支援している。フランスは元収容者を受け入れた。戦争を後方支援するとは、被害を受けた多くの人生に責任を負うことでもあるのではないかと。日本も受け入れざるを得ず。素晴らしい国ですから。教授は日本でも年間、教師をした経験がある。

「人間性こそが私たちが結ぶ」。サミが自身に書き記したように書いてくれた。